

がある。本虚標実，上盛下虚の証候である。さらに病情には軽重，病位には深浅の違いが認められる。軽いものでは顔面麻痺，言葉を滑らかに話せない，半身不随などが見られ，重いものでは卒倒，人事不省が見られる。軽いもの・浅いものは「中経絡」に相当し，重いもの・深いものは「中臟腑」に相当する。前者の予後は比較的よい。「中臟腑」では両手を固く握る，牙関緊急，顔赤く呼吸が粗いなどの閉証や，目を閉じる，口を開く，いびき，微細な呼吸，手を開く，遺尿などの脱証が現れることがある。

2. 虚風内動

津液が枯れ，血も枯れることにより，血が筋を栄養できなくなったり，肝腎不足となり，陰が陽を制御できなくなる。その結果，肝陽上亢，肝風内動がおこる。症状はめまい，卒倒，人事不省，手足の冷え，四肢の痙攣およびふるえ，言葉のふるえ，歩行不安定，頭部の揺れ，顔面のひきつり，眼瞼の痙攣。脈弦，苔黄乾燥。

3. 風痰内擾^{しんぷ}

風痰が火を混ぜ込み，心神を乱す。あるいは痰が心竅を塞ぐ。症状に狂躁不安，だれかれとなくののしる，言葉が支離滅裂，常に思い悩み人を疑う，などが見られるものは「癲狂」に属す。症状に卒倒，人事不省，しばらくすると意識を取り戻す，四肢抽搐，よだれを流す，などが見られるものは「癰証」に属す。

4. 血熱風丹

血虚から熱が生じ，熱から風が生じ，風邪が肌表を侵して，血熱が血を迫り立て全身をめぐる。症状は風丹〔水泡性丹毒〕が全身に広がり，発疹は痒く灼熱感がある。色は赤もしくは紫で，現れたり消えたりする。脈細数，苔薄黄。

5 風証の治療原則

外風治療の基本的な治療原則は去風散邪であるが，同時に「風を治めるにはまず血を治める。血がめぐれば風おのずから消滅する」という原則にも留意する必要がある。「血を治める」とは補血，活血，涼血，放血（たとえば少商穴の瀉血など）などの治療を指している。

臨床では様々な風証に対し，病因や病機，症状にもとづいて，それぞれに適した治療が施される。臨床でよく使われる治則には発汗去風，清熱熄風，鎮肝熄風，活血去風，涼血消風，瀉火疏風，清暑熄風，化痰定風，清上疏風，養陰熄風，益血去風，開竅去風などがある。そして，各型の風証にしたがって適当な風薬を選択し，病状にもとづいて風薬のメインとサブを決定する。たとえば，外感風寒では麻黄，蘇葉，荊芥，防風などの風薬を選択する。これらの風薬は辛温解表作用により，風を追い出すことができる。また，風熱では清熱，風火では瀉火，風燥では潤燥，風湿では去湿が主要な治則になるため，それぞれに適合した風薬を選択する。さらに方剤や生薬の選択では，君臣佐使^{*1}の配合に注意が必要である。

古代の名医が作り上げた方剤は，風薬の応用において卓見に富んでいた。たとえば地黄飲子の薄荷，天麻鉤藤飲の天麻，鉤藤，独活寄生湯の独活，細辛，秦艽，防風，銀翹散の荊芥，豆豉，薄荷，普濟消毒飲の荊芥，僵蚕^{きようさん}，薄荷などである。これらの方剤は補血，活血，養陰，清熱薬と風薬が配合されており，臨床において優れた治療効果があるため，長く後世まで受け継がれている。筆者はかつて1人の風火歯痛患者を治療したことがある。歯肉の腫脹・疼痛に対し，玉女煎系の清熱瀉火薬で治療したところ，効果がはっきり現れないばかりか，腫脹・疼痛はかえって悪化してしまった。そこで最後に玉女煎に細辛，僵蚕を加えて患者に服用させたところ，2回の服用で痛みは止まり，腫れも引いた。

* 1 君臣佐使：方剤組成の基本原則。君は主証を治療する主要生薬。臣は君薬を助けその効果を高める生薬。佐は君薬と協調して兼証を治

療したり君薬の毒性や激しさを抑える生薬。使はそれぞれの生薬を病変部に誘導したりそれぞれの生薬を調和させる生薬。

6 臨床でよく見られる風証の弁証論治

風証は、臨床で日常的に目にすることができる。ここに一般的な風証の弁証論治を症例とともに紹介する。

1 ……傷風

昔の人は傷風を「中風」，「冒風」と称した。これは一般的な「風寒感冒」を指している。また『傷寒論』では傷風を「傷寒」や「中風」と称している。『景岳全書』傷風には「傷風の病は，もともと外感によりおこる。邪が激しくまた深いものは，あまねく経絡を伝わり，傷寒となる。邪が軽くまた浅いものは，ただ皮毛を犯すのみで，傷風となる」とある。また四時不正の気による傷風は，比較的重症の感冒の流行をまねき，急速に広がっていく。このような傷風を「時行感冒」ともいう。

◆弁証論治◆

〔症状〕軽い者で鼻水，鼻づまり，声が濁る，咳の音が濁るなど。重い者で悪寒・発熱，頭痛・無汗，全身の疼痛。脈浮緊，苔薄白。

〔病名〕感冒，流行性感冒

〔弁証〕風寒が肺を侵襲し，衛気が表の固守作用を失う。

〔治則〕辛温解表

〔方剤〕荊防敗毒散，葱豉湯^{そうしやう}

◆症 例◆

〔患者〕劉〇〇，女性，25歳

〔現病歴〕一昨日，道中疲れてへとへとになっている時に，冷たい風にあたった。その夜，全身のだるさ，鼻水・鼻づまり，寒けを感じ，唐辛子入りのうどんを食べたが，よくならなかった。昨日，悪寒はさらに激しくなり，熱も出てきた。裂けるような頭痛，咳嗽，濁った声，食欲不振，全身の疼痛，無汗も見られる。脈浮緊，舌暗淡，苔薄白。体温38.9℃。

〔弁証〕風寒が表衛のはたらきを束縛する。

〔治則〕辛温解表

〔処方〕荊芥10g 防風10g 羌活8g 独活8g 柴胡10g 前胡10g 枳殼10g 桔梗10g 甘草8g 茯苓10g 川芎8g 蘇葉8g
(2剤)

〔第2診〕1剤目を服用した後，布団をかけて横になっていた。すると夜中に汗が出て，熱も下がり，悪寒，咳嗽も軽くなった。2剤目の服用後，頭痛，体の痛み，悪風はすべて消失したが，精神疲労，軽い咳嗽，納呆^{*1}などが少し残っている。そこで治則を扶正去邪に修正する。

〔処方〕黄耆12g 党参10g 白朮10g 防風10g 茯苓10g 桔梗8g 蘇葉8g 牛蒡子10g 前胡10g 陳皮10g 甘草8g (2剤)

〔総括〕患者は計4剤の服用により，症状が消失し治癒にいたった。いかなる違和感も残っていない。中薬による感冒の治療は，弁証を正確に行ない，適切な生薬を選択しさえすれば，その効果ははっきりと現れる。

*1 納 呆：胃の受納作用が減弱あるいは失調している状態を指す。消化不良，食欲不振，臍腹脹満などが見られる。

2 ……風熱

風熱とはつまり風熱感冒である。風熱感冒には①風邪と熱邪が結合して発病